

大通公園を望む窓辺から

右手首を欠いた ザビエル聖人像

常任理事 水谷 匡宏

マレー半島とスマトラ島の間に横たわるマラッカ海峡は、今でも海賊が出没する危険きわまりない航海上屈指の難所である。その海峡の沿岸で一番大きく、歴史の古い町がマラッカである。この町にはかつて大航海時代にポルトガルをはじめとしたヨーロッパの列強に長年にわたり植民地支配を受けた歴史がある。また、はるか560年ほど前の室町末期には、カトリック教会のイエズス会の伝教師としてフランシスコ・ザビエルが日本をはじめ、東洋での布教の拠点としたところとしても有名である。

運よく私は昨年5月に世界遺産に登録されている当地を観光で訪れることができた。マラッカの中心街を離れ、港や海峡が遠望できる小高い丘を登るとセントポール教会が静かに佇んでいた。そのすぐ横には、白亜のザビエル聖人像が紺碧の空に向かって凛としながらも観光客を優しく見守っていた。ところが、よく見るとザビエル聖人の右手首だけが無残にも失われているのである。なぜそうなったのか、不思議で大変驚いた。立像を前にして私なりにすぐに思い浮かんだのは、イスラム教では偶像崇拜を禁止していることから、一部の過激なイスラム信者が異教に対する反発行為として右手首を切り落としたのではないかと推測した。しかし後で調べたところ、ある日落雷が近くの大木にあたり、その倒れた激しい衝撃で一緒に破損したのが定説のようであり、先の私の推測は杞憂に終わった。

ザビエル聖人の立像を囲んだ周囲一帯は、平和でのどかな光景が広がり、これこそがザビエル自身が思い描いた東洋での夢だったのかも知れない。



さっぽろ雪まつりと大鵬

理事 佐藤 貢

今年のさっぽろ雪まつりは、外国人観光客が大勢詰め掛け来場者数は240万人と史上2番目となった。マカオの聖ポール天主堂跡や北海道新幹線の像などが、プロジェクトマップで色彩鮮やかに演出されていた。

昭和25年、札幌市民の雪像作りが発展して、今では北海道で最大の観光イベントになった。道内各地でも氷像、雪像を中心とするお祭りが催されるようになった。

私が初めて雪まつりを観たのは小学3年生の時だった。当時父親は日高で小さい牧場を営んでいて、売却した馬をトラックで札幌に輸送することになった。ちょうど雪まつりが開催されていて観光するために同乗した。

桑園駅で無事に馬を国鉄貨物列車に乗せたあと、雪まつり会場の大通に向った。

三越デパートで買い物をしていた時、窓を通して大通4丁目の大きな雪像が視界に飛び込んできた。それは横綱大鵬の雄大な土俵入りの姿であった。当時は異常な暖冬で雪像の大鵬はポタリ、ポタリと汗をかきながら混雑している人々を俯瞰していた。数日後雪まつりが終了し雪像も整理された。大鵬像もバツリと前方に倒れてしまった光景をテレビで見たとき、少し悲しい気持ちになったことを思い出す。

その後横綱大鵬は前人未到の活躍で国民のヒーローになったことは道産子の私にも自慢である。毎年さっぽろ雪まつりシーズンになると偉大な横綱大鵬を思い出す。先日見たNHKの大鵬の特集番組で、彼は相撲の天才ではなく人間離れした猛稽古の結果で横綱になったことを納得した。

これからも北海道から大鵬のような、そして雪像になるような横綱が誕生することを期待している。

